

土曜日

水野仙子

『吉田、吉田』

第三教室の南の窓から首を出して、田口先生は一人受持生徒を呼んだ。

『は』

と勢よく、吉田は組んで居た友達の手を放して矢庭に駆け出して来た。

『これ投函して来てくれ』

と、先生は長い其二本の指に繪葉書を挟んで手を延ばすと、吉田は埃によごれた足の裏を見せて漸く受け取った。そして姿勢正しく一禮して、踵を返すと、離れた處に此方を見い／＼待つて居た友達の、藁草履に赤い素足も近寄つて来る。

拭はずに擱いた筆も氣にかゝり乍ら、猶窓許を離れないでゐる先生の目は、首を集めて見ながら行く、二人が遊歩場の縫目を辿った。向ふから勢よく驅けて来た鬼事の一群に、一寸足を止められた吉田は、つと首をあげたと思ふと、傍のあけしやの樹に、身をびつたりと蟬のやうに密着けて居た一人の背をぽんと叩いて駆け出した。叩かれた子は、隠れた身も忘れて飛び出して、いきなり二人の肩に手を掛けて覗き込んだ。歩みは暫し遅くなつた。

三人は同じく高等一年生である。草書は讀めないのだが、眞ん中頃に

ある「無事着致し候」とだけは讀めたのであつた。宛名は門多波子様とある。

『奥さんだ！奥さんだ必と！』

叩かれた子は續けざまに叫んで、思ひ出したやうに吉田を叩き返した。二人は短い袴を蹴つて門を出た。

漸く机の前に戻つた先生は、堅くなりかゝつた筆の先を、噛んでは反古紙に棒をひき／＼、思ひは早くも彼の繪葉書が、三里の山道を、振る手調子宜い配達夫に擔がれて、狭い乍ら小ぢんまりとした家に投げ込まれたものとして、それを抱いて嬉しげな、新妻の笑顔を思ひ泛べた。

今度は低い、松林を背負つた小さい村の學校に、女生徒の輪の中に入つて、手を叩いて居る紫袴が目につぶ。其紫が床しく流れる。風のある日、「藁にふ」のかげから現はれて、柿の木の下のポンプ小屋を右に曲る外套の人は先生である。曲れば近道の長傳寺の前庭、蹈まれてくづるゝ其日かげの霜柱は冬の響である。其日も本堂の夕べの勤行がはじまつて居た。それは一昨日の土曜日であつた。一晚二晩宿つて今朝早く下宿に歸つた先生は、先刻野間といふ若い准教員が「通ふに引かへ歸る身の……」なんとか云つた語を思ひ出した。火鉢に手を翳して、口許で笑つて、優しい目は、先生の眞面目な、顔に注いで居た。野間准教員は文學が好きで、種々の雑誌などを見てゐるから、何か會心の新体詩でも口誦さんで居るのだらうと少しも意にしまなかつた先生は今になつてさつと

顔を赧めた。

途端に氣魂しく始業の鈴が鳴り響いた。吉田は息せき歸つて來て、繪葉書を投函して來たことを告げた。

此前の前の土曜日、田口先生は珍らしく欠勤した。それは霜解けの道は悪るかつたが、日影の差したうららかなる日で、代つて教壇に立つたのは野間先生であつた。體操の時間に、西洋のお伽噺をして喜ばれたこの若い田口先生は今日、美しい奥さんを貰ふのだと生徒に話した。譯もなく生徒はわあと聲をあげて笑つた。次の月曜日に、何氣なく出勤した先生の髪は綺麗に刈られてあつたので、生徒のうちにくすくす笑ふ者があつたが、先生は相變らず眞面目に教授をして居た。

奥さんは矢張り師範校出身で、若い後のおつ母さんが居るので、あまり懷かしがらなかつた。先生の故郷の、仁井田といふ村に教鞭をとつてゐる。

『田口君、後は僕が引受けたから早く出掛け給へ』

など、土曜日毎に調戲ふ同僚の言葉にも顔を赤めなくなつた頃は、奥さんのお腹に愛の魂が宿つて居た。

それから重い身には一番極い夏も過してほつと息をついて、そろ／＼寒さに向ふた十月の半ば頃、『田口君お目出度う！』『君お芽出度う』と口々に祝辭をのべられるやうになつた。然しそれも眞んの僅かの間、奥さんは産後の肥立が悪くて、遂々可愛い子を殘してあの世に逝つ

てしまつた。五日ばかり欠勤んで出校した先生の顔は、滅切頬がこけたと云つたのも見る人の氣の故ばかりではなかつた。生徒は先生が、此頃やたらに怒りつぽくなつたと言ひ傳へた。

降りもせず、照りもせず、曇つてゐるやうで其癖光線のいやに眩しい中冬特徴のぴりりとした寒氣のある朝、やはり土曜日であつた。始業の鈴が鳴り渡つて整列して、高等三年の生徒も教室にはいつたが、教壇の上の椅子は依然として机に組まれたまゝ。田口先生は遅刻したのであつた。うづ高くくべた火鉢の炭は、一分毎に黒きを滅して、熾んなどころは弱い焰をさへあげて居る。鬼が居ぬ間と惡戯組は、そろ／＼後を向きかけた時、上草履音忙しく先生がはいつて來た。

『禮！』

と俄に大人しくなつた。級長の號令で一禮する。

珍らしく先生は和服で、羽織は紋付、揉みあげのあたり剃りあと青々として、口唇も日頃より鮮かに見えた。ずらつと一渡り生徒を見廻して黒板の隅に書いつけた欠席生徒の姓名を消して、手の粉を軽くはたきながら、

『先生は今日、ちと都合があつて休みますから、國語を此時間に復習して、二時間目は習字、三時間目には清書を書く。そして歸つて宜しい。級長！これを渡して』

硯箱の上の作文帖を取つて渡すと、生徒は靜かに動揺めいた。

同じく土曜日であつた。先生は都合があるとて欠勤して、其晩仁井田で結婚したことを思ひ出す生徒は一人もあるまい。それから二年は夢の様に過ぎた。彼の事其事を生徒に教へた野間先生は、今年の春、兎に角大なる抱負を持つて、出京した。生徒の數も今は餘程減つて居る。先生は一度高師の試験を受けて落第した。

亡い奥さんの従妹で、遺された澄子を、並ならず可愛いがるといふ、今年十八のひと、今日結婚するやうになつた先生は、何とはなしに教壇を下りて窓の傍によつて唾をした。斑もなく、流れもせず、濁つたやうな空の色、人の心をひき締めるやうな日である。櫻に錨の校旗がひらひらして居る旗竿の下に、門前の長屋の子で、啞者とも違ふ口のきけない、感觸のない不具の子が、枕を背負つて、それでも軀を左右に揺つて居る。がら／＼と音して圍ゐの外を人力車が過ぎた。山高帽を冠つた車上の人の、白い毛の耳袋が目を引きいた。

外套を被つて門を出た先生は、濁つた空を仰いでふと二年前の其日を思つた。其日も霜解けの、屋根々々から水蒸氣のたつ、うら／＼かな、心の底までも解けさせないでは、やまないやうな日であつた。

底本…「文章世界」明治四十一年一月號

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年九月二日

改訂…令和四年三月三日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)